

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名	諸葛 玆
-----	------

論文題目

現代日本語における否定条件形式の多機能性

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	齋藤 文俊
委員	名古屋大学教授	釘貫 亨
委員	名古屋大学教授	宮地 朝子

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、「ナケレバ」をはじめとする否定条件形式を対象として、現代語における用例をコーパスにより採集し、そこに見られる多機能性に注目した共時的研究であり、本研究の課題・研究対象などを記した序論、本研究のまとめと今後の課題を示した結論の他、以下の5章で構成される。

第1章「ナケレバ節をとる複文の意味機能と構文的特徴 — バ節との比較を中心に」においては、肯定形の「バ節」と否定形の「ナケレバ節」の用例を分析することにより、「バ節」をとる文の主節の述語は肯定形で、意味的にも「望ましいことがら」となることが多いこと、一方「ナケレバ節」をとる文の主節は否定形をとり、意味的にも否定的になっていることが多いということを指摘した。さらに、「ナケレバナラナイ」のように「義務」機能に特化した形式では、意志的な動作性を表す上接語を伴いやすいことも明らかにしている。

第2章「否定条件構文における「デナケレバ」の多様性」では、文中、文末、文頭のいずれにも現れうる形式である「デナケレバ」をとりあげ、義務機能、選択肢の提示機能、さらには文頭で使われる接続語的な機能について考察している。

第3章「上接語からみる「デアレバ」の多機能性 — 「デアル」との関連性を中心に」では、前章で考察した「デナケレバ」の肯定形「デアレバ」を対象として取り上げている。まず「デアル」の上接語を通時的に調査し、近代以降、準体助詞「ノ」が付くことによってその接続が多様化してきたことを確認した上で、「デアレバ」については、現代以降に「ノデアレバ」という形式で用法が広がったことを指摘する。

第4章「現代日本語における「ナキャ」の多機能性について — 「ナケレバ」との比較を中心に」においては、「ナケレバ」の縮約形である「ナキャ」を取り上げて論じる。両者の相違で顕著なのが、文末に用いられる「終助詞的用法」、及び、「デ」を伴って文頭で用いられる「接続詞的用法」で、このような「非条件的用法」においては、「ナキャ」の方が多く用いられるとする。また、「終助詞的用法」においては、「ナキャネ」という形で終助詞「ネ」と接続し働きかけ機能をもつ用法が多く見られることも指摘している。

第5章「否定条件形式「ナケレバ」「ナクテハ」「ナイト」 — その縮約形との比較を中心に」では、第4章において論じた「ナケレバ」と「ナキャ」との対比をもとに、「ナクテハ」と「ナクチャ」の差異、そして否定条件形式の中で接続助詞「バ」を伴わない形式である「ナイト」について論じる。「ナイト」は「条件的用法」への偏りが高いことが特徴的で、「ナクテハ」と「ナクチャ」においては、「ナケレバ」と「ナキャ」間で見られたような、縮約形での「非条件的用法」への偏りは顕著ではないと指摘し、その要因として、「ナクテハ」と「ナクチャ」がともに「不適當」・「義務」機能を表す形式として固定化していることをあげる。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

否定条件形式の中で、「ナケレバナラナイ」などのように義務・当為を表す用法については、近代以降の変遷を含め、これまで盛んに研究が行われてきた。また、条件表現全般についての研究の蓄積も多くある。本研究は共時的な視点から、否定表現形式の多機能性という観点に着目し、その広がりについて論じたものである。

本論文の評価される点として、以下の三点にまとめられる。まず、第一点は、否定表現形式を中心とする「バ」「デアレバ」「ナケレバ」「ナキャ」「ナクテハ」「ナクチャ」「ナイト」などの用例を、現代語を中心にコーパスを用いて数多く収集し、そこから帰納的に結論を導き出しているところである。収集した用例を、主節の述語の品詞や否定形との共起、各語の上接語の品詞、さらにそれが動詞の場合には、他動詞、意志的自動詞、非意志的自動詞などに分類して、それぞれの特徴を明らかにした考察は説得力がある。

第二点は、否定表現形式の多機能性を整理したことである。第4章・第5章では、「ナケレバ」「ナキャ」、「ナクテハ」「ナクチャ」について、条件的用法と非条件的用法を分けた上で、非条件的用法を、評価的用法（義務・当為を表す用法）、終助詞的用法（文末で用いられる用法）、接続詞的用法（文頭で用いられる用法）、並列・列挙（二つの事柄の共存・非共存、属性の有無を表す用法）と4分類し、さらにそれぞれの用法について特徴を詳細に分析している。

第三点は、共時的研究の利点を活かし、縮約形と元の形とを対比させて論じたことである。第4章では「ナケレバ」とその縮約形の「ナキャ」について、第5章では「ナクテハ」とその縮約形の「ナクチャ」とを取り上げている。そこから、縮約形の「ナキャ」「ナクチャ」は、元の形である「ナケレバ」「ナクテハ」に比して、終助詞的用法が多く用いられるなどの興味深い結論を導き出している。

ただ、課題とすべき点も見られた。本論文は現代語における共時的研究ではあるが、近代以降の当為表現の変遷をふまえた上で、通時的な考察を行うことで、現代に向けての用例の広がり状況などがより深く分析できたのではないだろうか。第三章では多少その点に言及してはいるが、用例調査、考察両面において不十分である。また、条件文の分類の枠組みの名称が章によって異なっているなどの不統一も見られる。さらには、他の条件表現の形式として、現代に多くの用例があるものの、慣用的な表現を構成しない「(ナカッ) タラ」「(ナイ) ナラ」などについての言及がないことも惜しまれる。ただし、これらは本論文の「今後の課題」においても言及されており、今後の研究の進展によって補うことが十分可能なもので、本論文の基本的な価値を損なうものではない。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと判断した。